

人望、家柄、成績——三拍子そろったこの俺が、大学のカーストの頂点に立つのは必然だった。

周囲が俺をどう見ているかは、相手の表情を確かめるまでもない。羨望、嫉妬、そして本能的な服従。赤羽虎也という人間が放つ引力に、誰一人逆らえない。廊下を歩けば人の波が割れ、教室に入れば誰かが反射的に席を立つ。

でも、俺には秘密があった。

一冊の『ノート』。

そこには男でありながら女の身体の器官を持つ、カントボーイとしての俺の欲望を、びっしりと書き込んでいた。『連続絶頂』、『公共の場での絶頂』、『絶頂の禁止』……。玩具で身体を開発していくシチュエーション。誰かに無理やりされるのを、密かに妄想していた。

けれど、もちろん、誰も知らないはずだった。

あのノートを落とすまでは。

『あの、さ。……探し物、してるんだよね？ ……』

あ、赤羽くん……』

拾ったのは、大森心大（しんだい）だった。

猫背に前髪。粘つく視線だけが鋭い、カースト底辺の男。

あいつに秘密を握られた瞬間から、俺の完璧な日常は、音を立てて崩れ始めた。

『こ、これ返すから。だから、君がノートに書いた理想のシチュエーションを……ひ、一つずつ、俺と一緒に実践しよう、よ？ お、俺も、て、手伝うからさ……♡』

『予習』と称された誰もいない講義室でのクリ責め。男子トイレで、ローターを使われて。

特に、外に人の気配を感じながら絶頂させられたことは、嫌でも脳裏に焼き付いていた。我慢しようとすればするほど、身体は正直に応えてしまってた。

最後には、男子トイレのタイルを、俺自身の愛液で濡らしてしまった。

『こ、これ……明日も、持ってくるね……♡』

ローターを手にして、そう言ったあいつの声が、
耳の奥でへばりついて離れない。

昨夜、ベッドの中でも身体の奥のじんじんとした
疼きは消えてくれなかった。見知らぬ誰かに嬌声を
聞かれてしまったことは、屈辱的だった。

それなのに、眠りにつく直前、俺の指は男子トイ
レでクソ陰キャの心大にされたことを無意識になぞ
っていた。



二限の終わりを告げるチャイムと同時に、スマホ
が振動した。

画面を確認するより先に、心臓が跳ね上がる。

『三号館の四階、奥の資料室に来てください』

三号館の資料室。

年代物の判例集や、もう手に入らない専門書が眠っている場所で、足を運ぶ学生などほとんどいない。黴と紙の混じったような淀んだ空気が充満し、外の喧騒が嘘みtainな静けさだけが漂っている。冗談交じりに『法学部の棺桶』などと呼ばれる、忘れられた区画だった。

（また……。また、今日も同じことをされるのか……？）

「クソ陰キャ野郎が……！」

アイツの思い通りになるようで、イライラする。けれど、行かなかったら、どうなる？

答えは、考えるまでもなかった。

ノートの中身が広まる。書き込みも、赤ペンで丸をつけたページも、全部。『連続絶頂』『中出し強制』——俺自身の字で、丁寧に書いた言葉たちが、俺を慕う連中の目に晒される。

ゼミの奴らに。頭を下げてくる後輩に。俺の前で

は媚びるくせに、隙があれば蹴落としたいと思っているような連中に。

きっとそいつら全員が、手のひらを返して俺を指さして笑うだろう。

(……行くしかない)

そうと決まれば、すぐ廊下へ出た。どこに行くのかと聞いてくる連中に適当に返して、なんとか振り払う。着いてこられるなんて、ごめんだった。

三号館の資料室は、建物の端にあって、採光も悪い。昼間でも薄暗く、廊下が続く踊り場には誰もいなかった。

扉の前に立って取っ手を引くと——鍵は開いていた。

中には、心大がいた。窓の外から差し込む鈍い光が、長い前髪を半分だけ照らしていた。

古い椅子に腰かけて、俺のノートを大事そうに手に持ちながら、ページをめくっている。

(見てるだけで、腹が立つ……)

猫背。だらしなく曲がった背筋。

それでいて、俺が扉を開けた瞬間に向けてくる視線は、ぶれることなくまっすぐだった。

あいつの目の奥にあるものを、上手く言葉にできない。ただ、こちらを隅々まで観察しているような、粘着質な熱があった。

「あ……！ き、来てくれたんだね……！」

嬉しそうな声で、心大が言った。

「……当たり前だろ。行かなかったらどうなるか、わかってんだから」

「あ、あの。それは……そ、そうだね」

心大は視線を落として、ノートに目を向けた。それからまた俺を見る。

「……意外だよ、やっぱり。……赤羽くん、こういうことを、毎日考えてたんだなって……」

ノートの背表紙を指でそっと叩きながら、あいつは続ける。

「カーストの頂点にいて、誰からも崇められてて。……なのに、こういうことが、頭の中にあったんだね……♡」

「黙れ……ッ！」

じわじわと、顔に熱が上がってくる。腹の奥から湧き上がる怒りを、奥歯を噛んで押し込んだ。

けれどすべての元凶は自分だ。それを思うと、余計に腹立たしかった。ただ、うっとりとした表情を浮かべてノートを持っているこいつが、今この瞬間、世界で一番憎かった。

「……返せよ」

「い、いいよ。全部終わったらね♡」

心大はそう言いながら、ノートを隣に置いた。

「じゃあ、昨日のふ、復習から、始めよう……♡」

立ち上がった心大が、一步こちらへ踏み出してくる。

猫背のまま、それでも高い背丈が俺の前に立ちはだかる。そして長い指が、確かめるようにそっと俺の頬をなぞった。

「き、昨日さ、トイレでローター使って……潮、吹いてた、よね……♡？」

「……っ、吹いてねえ！」

「で、でも……ぷしゃって出てし……。そ、それに、床にも水溜りが……」

「うるさいっ！ そ、それは……っ、違う、そういうんじゃない……」

「え？ じゃ、じゃあ、ど、どうなの……？♡」

（クソッ……！ こいつ、マジでムカつく……っ！）

顔が耳まで熱くなる。言い返す言葉が出てこない。事実だから。それを認めたくないから、余計に声が上がって、言葉がぐちゃぐちゃになっていく。

「……っ、お前が無理やり……したんだろ。俺が望んだわけじゃない……」

「そ、そうだね。……で、でも、声、すごくよかったよ……♡も、もう一回、あんな声……聞かせてほしいな……♡」

「……ッ、黙れクソ陰キャ……！」

「ご、ごめん……っ」

心大は少しだけ身を縮めた。けれどその目は、少しも揺れていなかった。

「……で、でも。そ、そんなに大きな声、出したら……き、気づかれちゃうよ？」

「……あ？」

「だ、だって……赤羽くん、す、すごく人気者じゃん。……こ、この棟、人少ないけど……声が廊下に

漏れたら、誰かが……き、気になって、覗きにくるかも……しれないし……♡」

(……ッ。それは、お前がイラつかせて、大声を出させるからだろうが……！)

怒鳴り返したいのに、言葉が喉の奥で詰まる。実際こいつの言っていることには一理ある。古いドアの向こうから、かすかに話し声が流れてくる。チャイム直後の、廊下を行き来する足音も。

俺は仕方なく、唇を引き結んだ。

「あ、あの。……じゃ、じゃあ……始めるね……？♡」

そう言い、心大がポケットから何かを取り出した。見れば、昨日も見つめたピンク色のローターだった。

(またそれかよ……っ)

見た瞬間、おまんこが勝手にじわりと疼いた。